へ14 2690 6
へ14 2690 5
へ14 2690 4

廿六名も高楠
妻婦の小傳
東京奇聞
芳川俊雄閲
二編上
へ14
2690
4

へ14
2690
4

其名も高橋
毒婦の小傳
東京奇聞
第二編上の巻

己卯の春

高畠耕雲 画

高畠文庫

拙なき著述を御見貶から昨年中夜嵐阿衣の冊子で甘味を嘗さ
慾張て又そろ今度の毒婦傳先月卅一日ホハツサリゆゝれと翌日のう
燈火の下で書綴り草稿をる内一週り湯場の咄ふ念が入り餘う長いと
迎ひの催促家從なのゝ小僧の使ひ中旬頃ゆ出発ちたと島鮮堂
ゞ大急ぎに不出來ちぐゝる早いが賞玩めゝ試しに上て御覽
と賣出いちぶどうであらうと思ひの外和兒さん方の御意ふ
適ひか傳の後いまゞ出來ぬうと和替りに御催促に力を得さ二
本目い味よ一川の塩加減極念入の上塩梅あらあ御催促とうけぬゆう
ゝまゝ仕込がゝてはりますと手前味噌とはぎのうと考へう

明治十二年二月下旬

岡本勘造題

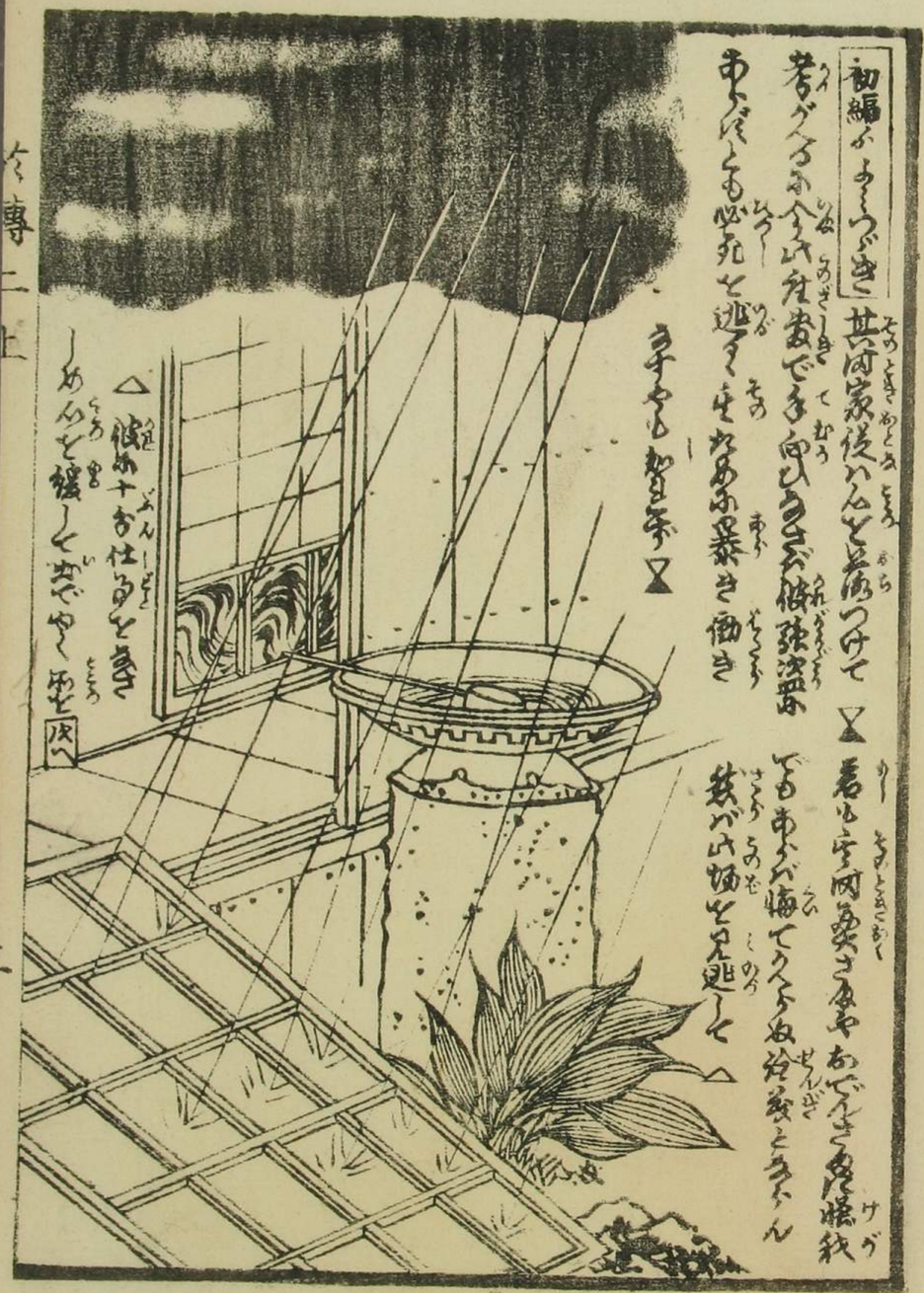
原田の家來
加藤武雄
會津浪人と云

古着商人
内山仙之助
後藤士郎藏
仙之助外妾
青木於勇
於傳の姉と云

初編がよゝつづき

其内家後いんと蒸つけて
若ゞくるふ今は社会でも向ひうさぶ彼強盗
ゆくべくも必死と逃ゝ生なあふ暴き働き
ゆくべくも智恵ゆ

△彼れ十お仕ゆと言き
しめ心と縁しとぞやく死



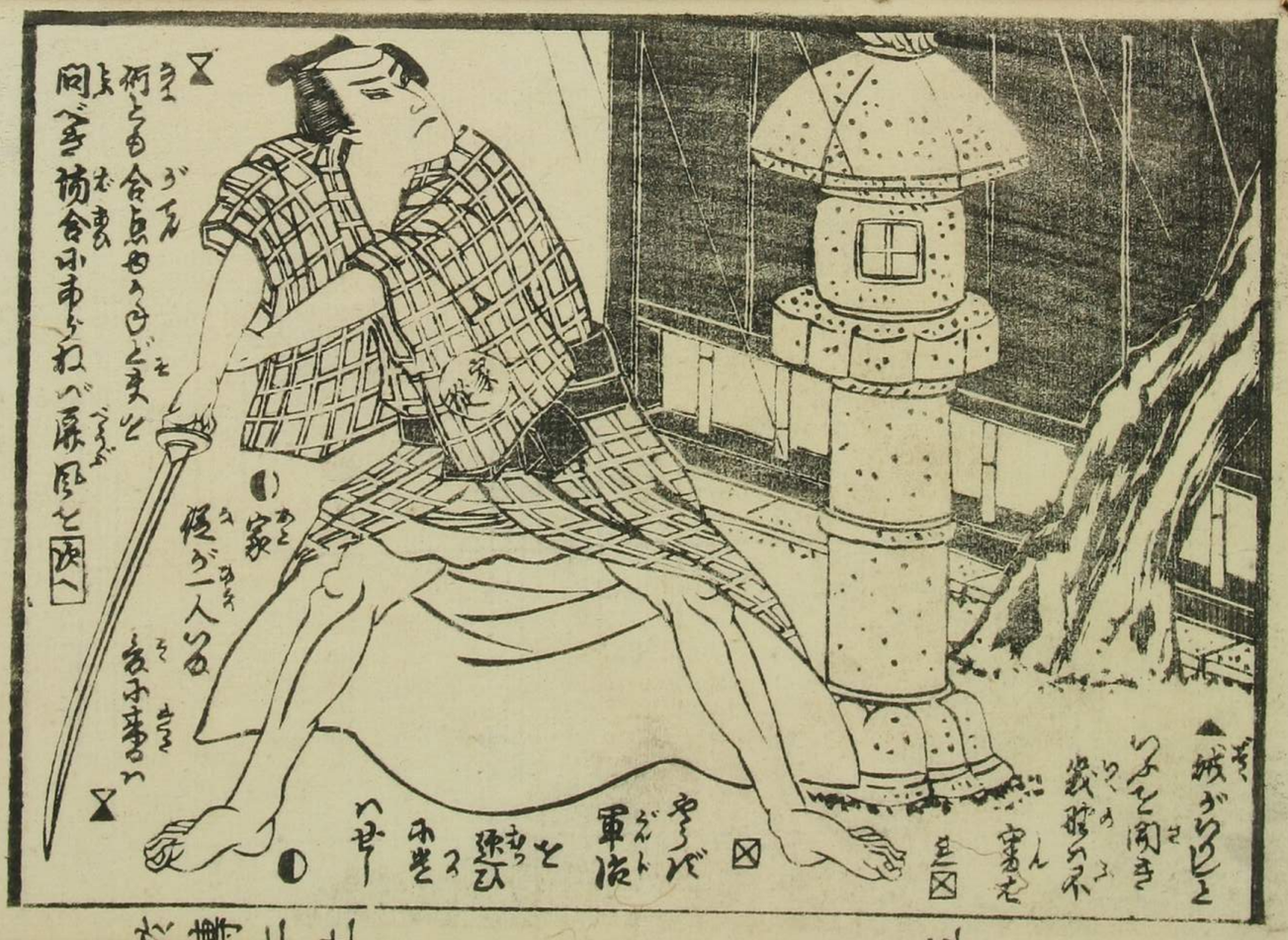
若ゞ空岡桑さ多や
あでふさと鬼嬢我
でもあんば悔てくくらぬ
我が山畑をと逃ゝて

つゞき 扉小で押へてゐれども
此方からも密と扉うへ出でゝ要の姿
の後ろ向に紙い紙屑の大口を要の
方へさしあけやき紙屑の方へ出びる新の実

◐ 出るゆもでゝれず
引よ
ひけ
途方
ゆれて
ちあ
らふ
う
ち
要い
慌いの
小柳ろう
紙屑ろう 第七編出

ろにてゝくれども脇格合ろう衣服の紋を家田
要ホ和遠ゝられば松へと家後い再び駆ろう
兼て世ろの風宵ホ常ーホ遠つず夫さゝと
密通ろして
あろ
ゝる
ゝ
那が意ホ
要さゝと
仕て戻れと
いゝ色い色苦の
幸せ仕那紙のう要ゞろの
地へ来てあろゝを那ふびホ居たい迂間ホ百回ゝと
幸が出来せろどゝたのものと勇気ゝあろゝ ◐
中ゝる用ホの合紙を
残らず振紙ホ押色
を懐中色
て木笑む
ハゝーゝく
紙の不業
ゝわれば
家殺へ
又も
怒りを
合ゝゝ色ゝ
とゝとゝあれば要い幾那ゞ
麻布ホ近づき麻紙を 次へ

つゞき
あけぐれまぎれて後ろ
力をちからをと
なびもあらぬ拳動ふ家
心顔例一
要と
踏返せば
起き
つけ


城がらとと
家
侍が一人
同じ

つゞき 小楠が身をたゞあり撰子と
何ぶ屋先で下々
と劔のみ音信
細やあらんと
そんどもまぬ
もろろ血腥やま
が涙もあわれび
兎も角も明
をつけんと小
婢どもどど
養人もあき
立る

☒ あの世
みと驚ふ
あれ往愛へ来たべ
仮家のさろ死おいの巳の森焼て
逃出しさて女ぞ撰者の
白人へあら
せーよ
ひと差
出せ
婢逃しあれも
賊を捕へんと

あるんと抱てと
ろろく屋の弟子
如何ぞと言とりむ
ぞろり給仕もあしにろる空合の
雲もと紀之国屋月の
光りの侍と浮と嬢と言り
賊へ逃
出を要
の仕と
何和まぞりと
逐ひ〜家従い弱きふ
あるねども二日の張の茅卧に

☒ 合事をあるを口情さ
眠ろ〜んで途中に側と
又あひろる力もつ死逐ふ
要をえ先るひすごく
屋先の

と
撞枕ぶ
見に集
ふそひーめく
ふぞ
家従い
賊の
撰子と
指り時き
ふ弱れ〜逃世ぶ
給失れ

☒ 石ふ血まふの表て
るいぞもも下を刀傷と

次へ

つゞき

とても安く十分に儲けをあらせうべ

元禄年間の俗儀

ゆめ及ばねば

◐嘸ふ云れば出かけを捕へて面白さうと思ひ遊廓の様子聞に成

◐殺害

其ほか

撰ぶ

子よ

彩へ

和殺ず

中世ある

ねを絹へ

原田要ふ

何せも安ふあるべしと若衆どもを

労らひて引とらせまゐらう幾度へ勧文第つ

うらめる紙をこんぜてそれ以上を賤く偽へ

大面ふ殺伐せ〜撰と偽り

逐電に出あひて

路ふ迷ひ遅

く列居せ

ま〜撰投も

せず他と」をろふ形々の

次第ゆえ其今形失ひ言へ

とのひ」い何もを殺ず毒

うあの事金くへ第の

金を残らず盗を出うると◐

和遠ふ紀青

と逐一偽る

ふ一ふ幾

那の

拍ふ

こえ

なれば

今さら

色む

殺ぬも

ふ

わば

▲此ごと仕ラけ組
そゞの時と費
やせーうが御
の事でなる
て出く途中
ぐ疲れいろ
拵物の用意
いと大難渋
の打ち刻
ー世逐別
が入り出
この逐別ぐ

家伝
い物ゆて
笑ひ話
べ牡丹が
沼田ろう
軍法さま
体と度ま
知り尋く
君を問いこ
仕事の
ひ泳く工
○素と推察せるい今日沼田ろう
廣る途中帝城の四外見にて
京田の家来加茂武雄ホ出会し
何ぞ人参るとの事故見さあり
と答へしに大夜の夕方ハ
一体と
武雄ホ
猿人まそと
いひくる数
似た者ーが大分要
の工夫ゆて拙者と面
面へ
武雄ホ途中で
遮ぎられ自分ハ
を嬢と殺宮ー
今と決斗で主
退くろ元で
ありしろと 次へ

つぎ　口上の一さ
者わかい我郎い
懸とあるに
互ひに手を合せ祝す
内ゆも軍法が来
ぬのと家侍が遅
らも取りと在とび
あひ勤番つる長赤
とも早く戻るの状
ぶ世もつらねども拝
る事があるへ一日も
遅延するが暮ふあり明日早く動る
る事ふ取きあ来より俄ふ義拝

探らるるを後とも拝見の図

世とあ
さつ
田へ
上で
絵俵と
せんと
き沼田へ

生外の在ろうぶ出
暑月元の整めひ
しに在ものぐと
明渡り
かや
ろれば
旅宿
のと人へ
出立の
勢き
て通
ど旅籠
筋三挺と引
人足の月元をなじめ

立渡り足が抜
と結ぶと知ふね
べ銭所い要が
るを遠
一番り
当ろう
ざると
家従
が代ッ
前
夜の
八月

を図

購求

芳川春濤閲
其名も高橋毒婦のお傳
岡本起泉綴
東京奇聞 七編 よしの切

芳川春濤閲
島田一郎梅雨日記 五編 ふみの切
岡本起泉綴

芳川春濤閲
白菖阿繁顛末 三編 ふみの切
岡本起泉綴

太功記銘々傳 四冊

御所桜梅松録 十五編 近刊

命養生善惡鏡 折本 一冊

單語圖解 折本 一冊

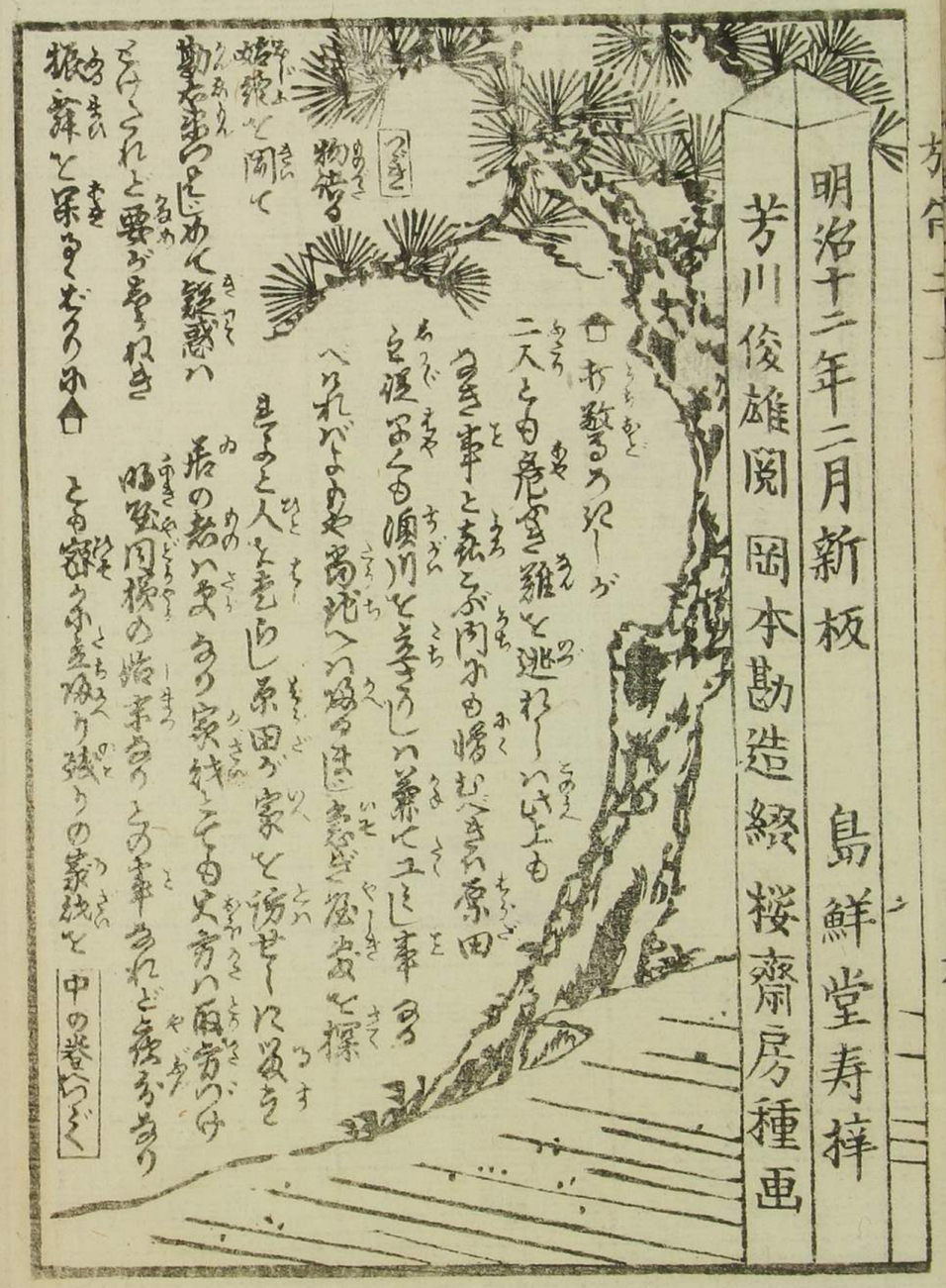
徳川年代鑑 折本 一冊

亀地錦絵本問屋

麹町區壹番町六十番地
編輯人 岡本勘造
淺草區瓦町十二番地
出版人 綱島亀吉

明治十二年二月新板

芳川俊雄閲 岡本勘造綴 桜齋房種画 島鮮堂寿梓



つゞき

物語る

婚姻を聞て

動乱を生じ人心惑ひ

らんくれと要ぶ者れき

旅舞と呆るもだろりか

中の巻つゞく

へ14
2690
5

へ14 特
2690
5

慶應義塾大学

上巻のつゞき

持出すもあれば番人と出会ひ捕へられ
あるて型の要が源川ゆと城をとらえ
面け尚も好出と探索さ世ゞ夫ふるらぶるよう
退対者と化徹て素男の家へ引張とまり
幽閉せ面い世界の風雲急激い疾うう
如何ゞ要と名義をしてある

事を知らずれ四ゞが源川うく
供る家源ゞちゞゆく
名付ゞ月の
内ふ泊
逆世ゞば
悪源い怒りあと
も厥ゞ疲れと家法ゞ

▲打退させ
幾地と成へ
係ゞる陰
動よ

○要へるの家ゞ
さらう再び

▼深下へ陥ると
はずを
き退
ゞ

あゝ己ゞ如何の
逃げと知る者
へあの付らひに
要へ紙を
ちらふして
出安

次へ

つゞき せと作り届けてのめくと
不義せーしが房とそのあふ
可愛がると
かくとふい
嫁程高価
りの利はる家老と
縁切せーも
如ふみそんも
ゆふ物うと面々ふ
汚さるのくらい生事をと出
西ふ深め町奉行ふる用出来
遊入る者もあり程なく最く風説の
うくまるあぞ動ちあるの表意

☒ まれざると如何ふ
せんちべを器

○後取り
も何とあ
らの世のう
人々ふ指
さうも
嫁ふ
ん
らぬ事のくれ
べ不快と
いあそあこ
日一間の内
ふ間柔も
仔細とあ

一分あ民芸活絹屋の
つよ紀と姫ひ奸ぬや

濡衣とあすん ☒

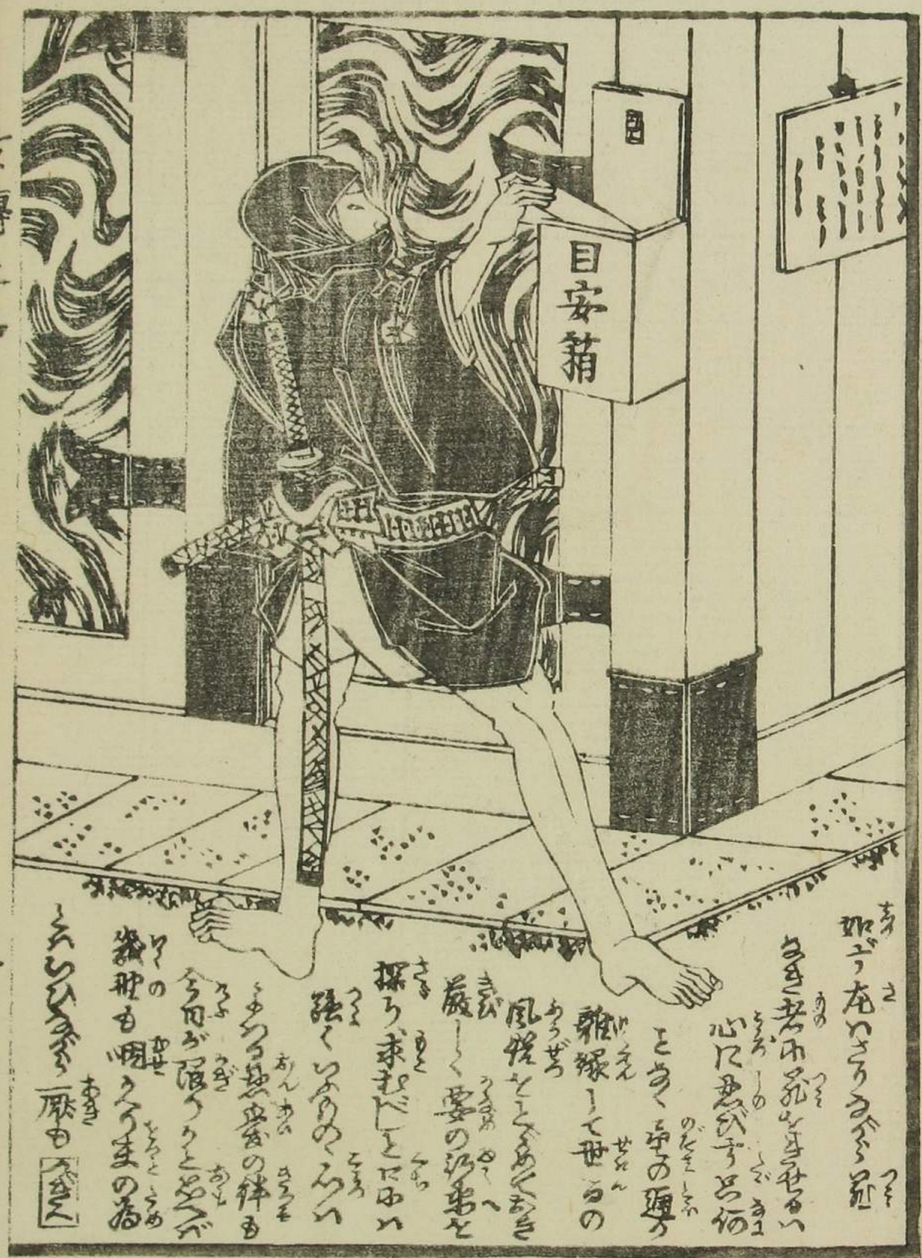
一ある女房
幾程
もんを
苦しめ
流絵
ふ栗を
拘ふ宮ぬ
と生ふ物
ひ今あふ
い遅れど
実ハ要と
不義世ぬ
朱ぐ行密の ☒

☒ 要と反押へ
今味するより
外出れど

つぎ 四宋故とりひこひが相きが文て
あら成故仲よく暇をトさいが氏上か
ゑ死仕合とゆゑ添言のある
ことゆくも苦ふたる勅
右衛門ちうりゆきまでとそ
我女房裏ハ合七孫一二人市ゆ
虎と出たとい古人の今云入ゆ世上
の人口と塞ぐ術
ゑ死仕合とゆゑ
も大方い要豆浅ゲ
何是ゆゑ死匿生て流
云とゆゑすとゆゑと
あぶれゆ悪も一所い天ゑ捨ち

▲ゑ死人と悩ゆすもなぞ区し く保結
ゑ天
の定まる附あって
互ひの浮名とゆゑ
ゑ死

☒いとらんゆゑ丈ま心好
ゆめ工ゆに嵐ゆ
と
ゆゑ
かけて知つて彼と待るに



如ゑ花わさりゆゑ死
ゑ老中死ん生るハ
心に思ひすゑ伝の
とゆく命の運ゆ
雑縁ゆて世るの
風俗とゆゑ
嚴ゆく要の沉黙と
探ち求むべとにゆい
強くいゆのゆゑい
ゆゑ悪業の絆も
ゆゑ沉ちゆゑ
義理も明ゆゑ生の為
ゆゑ一所も

あれも世間中と
別れるさえも
忠臣孝子

◐習慣
あれ
いかんせん
世間へ
再び要る
狩り場

◐主人の浮名
晴れて
世間へ
出れば
離縁の後の
方へ
縁付くとも
うらん花も
咲く時
風流に恋を
忘れず

◐世間の人は不義者よ淫奔女と
口々に指さけられるが口惜しい仲も併もある
うらぶ要の仇名と言はれて夫の落度を
あす由もあらぶ表へ出たび迎へ二人の子供を
選んでおのれ八年奴朱を
さらば勝を捨てうるうと思ひ寄せ酒川の
旅店に要の丹かんを
あらくて世間とかもふ
にあの宵の稽古
ちひい同じ

あけ候金要の
行末ばかり
妻と離縁せ
しが密夫
親里へ
又も良
同じ
主
れ
お角
の
世間

つゞき　ほとゝもいくねがふくゝあらしき縁を探すし　まや屋やの　▲励しこべせるの風説も
ためとして衣類を道具を外にも者の金ふと出さるゝ
べしれど若ゆあでんが邪魔ゐふべ変れたらいくぬ
潮々五才の東西あふべを今母親の懐裏と
ちるすぐ不便と祝ゐあ恩義此も　いろゝ
あでんを紙きで育てあげるとのふ不　如き自
仕せる勘右衛つま婦ころれも治風のこと　然と義
ふあふねば後々とも後　此が良
と数の人義此の　景色ゆ
名前を蓄めの者　と傳へ先ふ
とゆ久さ世沼田の様下　吹けり若も
かゝの情ろ離れる利根郡　大いふ赤西し
後原村ゆる秋元浩谷小右衛つ　て要ゞ不業を
妻を親縁し　慣ひ婦金よ
なしこべ初六郎

を味ふ世一位一付を抽籤り部屋　を類きと上へ届けて和彩ろ　ハ密ふ不
ゆく離縁のあゝ注弁を速ゝ就　世出勧右　森右動と▲　森と
てふゆく何月（脱とも縁付せよと　尚也
いハ金ゆて幾世の春を小春　要と
へ引渡しする勘右衛つの心の内　尋ね
ゆく　牛
ゆゆ
法れ
ぬ覚悟の
おそる軍法が
別を楽しゝ家後十博　ゞゆの葉きの
様ハ銘りくゞくゝ　ろれば器ゆと氣も看客　あとを筋の表ゆ命して
よ色しく安ゝ安彩と勧右衛ついひるゞゆ　厳しく探索をきあろ　名を書ゞん
　　○　和田おるハ名ハも　森右衛

幾改春
春日

つゞき 夫婦の間みまく
一人の子供も育れば
業ひ子ゆゑも甘んじ
とかりふれ
ゆゑ喪ひ
門岡
の縁
おうりといふ

九

※九右衛門の娘女とかりより縁喪
日傘あて懐よ花よといろ〳〵生立育て
つけて面相の美麗ものうり
村の老に
の業らく
安白き
煙管
いまれ
がら
お武家
の縁

おでんまれば見
の方うて業ひ
うけて業ひのうんと
ゆふ冊ふとも一附ふ
縁付事にきあり生々
式と沙汰ひ〳〵安政元寅年の正月ふ
お妻い実ふ縁ふ死のめとふ元宝淺家内ふ不和が
かうて又も離縁とかのり年猶で外へ縁付〳〵が
間もなく病死〳〵元禄生中ふ蕪の汚点を書記

遠ふ
さ
の
畑の中で
育つて
自然と
傾る娘西合
の優〳〵紀花を
田舎の者ふ初すいとき
事ふうとふのどきて
九右衛門つ夫婦ハ心ふ喪び
つゞく育て〳〵紀事の

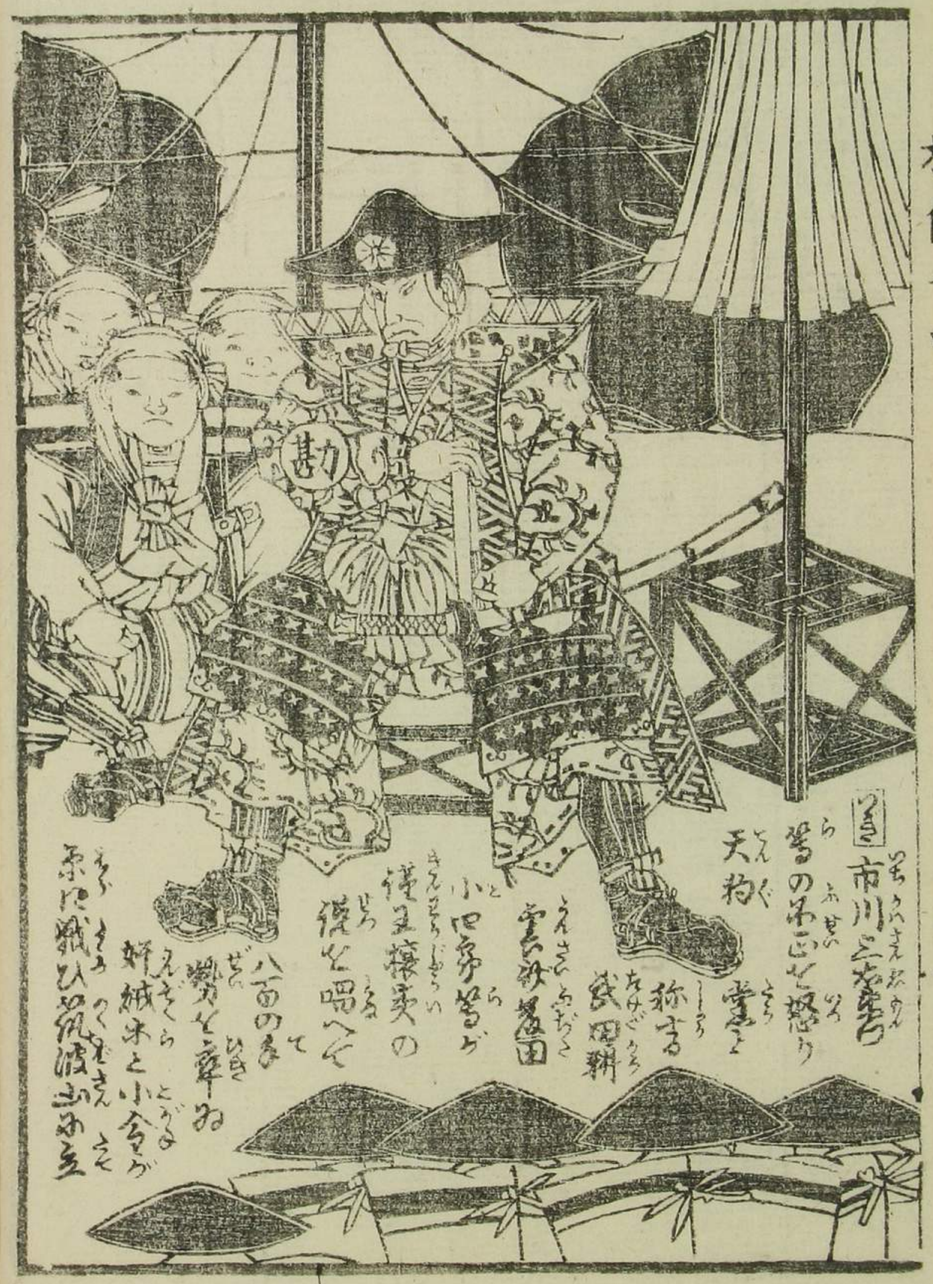
女房

※おでんまれば見の方うて業ひうけて業ひのうんと ゆふ冊ふとも一附ふ 縁付事にきあり生々 式と沙汰ひ〳〵安政元寅年の正月ふ お妻い実ふ縁ふ死のめとふ元宝淺家内ふ不和が かうて又も離縁とかのり年猶で外へ縁付〳〵が 間もなく病死〳〵元禄生中ふ蕪の汚点を書記

遠ふ さ の 畑の中で 育つて 自然と 傾る娘西合 の優〳〵紀花を 田舎の者ふ初すいとき 事ふうとふのどきて 九右衛門つ夫婦ハ心ふ喪び つゞく育て〳〵紀事の

女房

月の光も過ぎうて今年は
元治元年と改こあり
累は十六才金の花の咲
しかあるも船らふるみ
しこそ戦後一ぱいの
ぐり彩色
村の若衆
つるみ
ぐ再び上洛あつて京都
云孔おとり関東にて
鬼角
じき折
水戸
藩
一家中


市川三左衛門
甚力
天狗
小四郎
武田耕雲斎
八面の
鬼と章ね
奸賊水戸小金が
赤に戦ひ乱波ふれ立

幕府
泥田藩
進こ佐藩の
上野の宮へ押こも
武田の
悪

芳川春濤閣
其名も高橋毒婦のお傳 岡本起泉編 東京奇聞 七編 よしの切

御所桜梅松錄 十五編 近出板

芳川春濤閣
島田一郎梅雨日記 岡本起泉編 五編 よしの切

命養生善惡鏡 折本 一冊

芳川春濤閣
白菖阿繁顛末 岡本起泉編 三編 よしの切

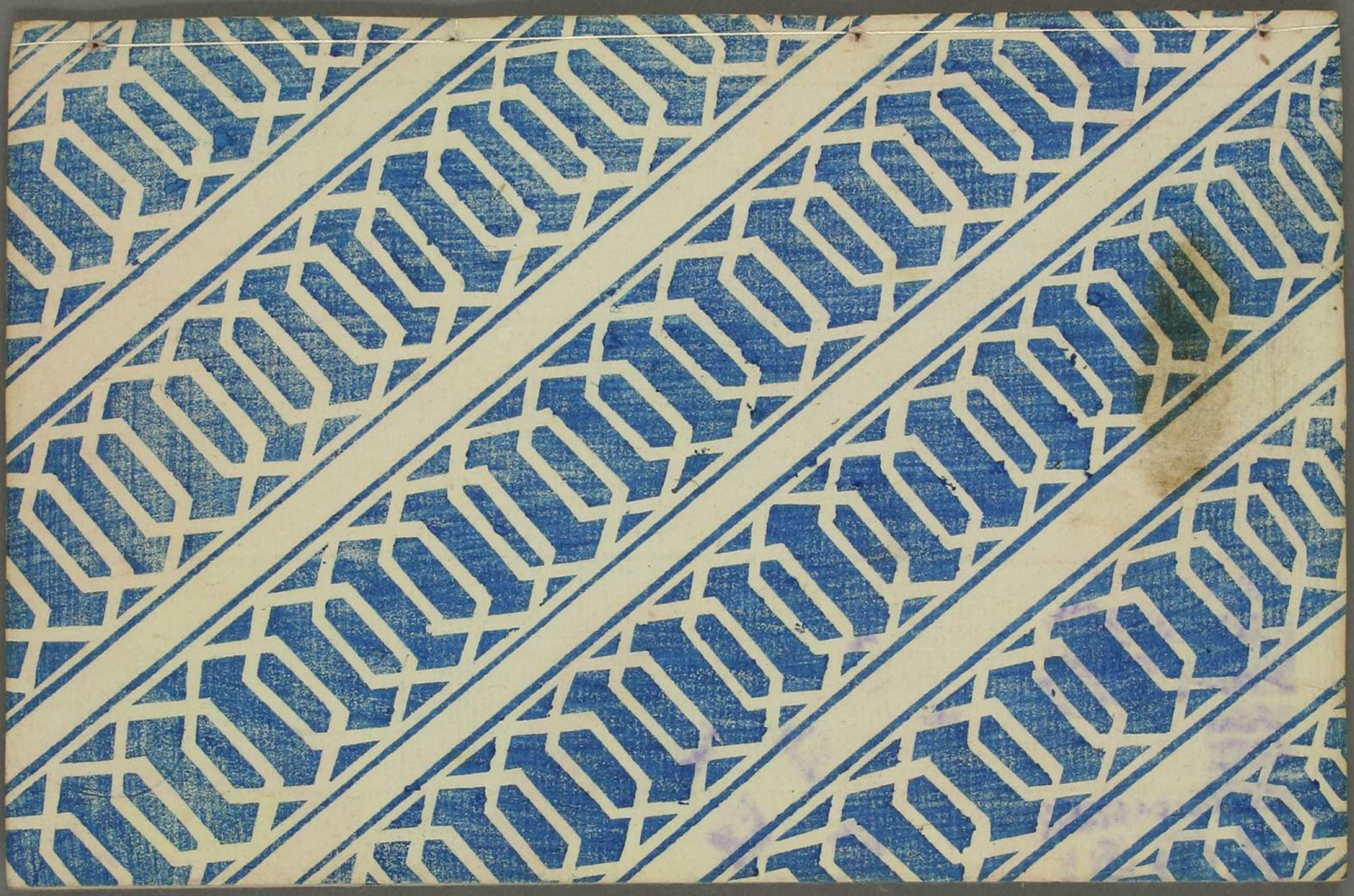
單語圖解 折本 一冊

太功記銘々傳 四冊

徳川年代鑑 折本 一冊

亀地錦本繪問屋

麹町區壹番町六十番地 編輯人 岡本勘造
淺草區瓦町十二番地 出版人 綱島亀吉



へ14
2690
6

へ14
2690
6

中巻のつづき 中ごく秋の長び日の夢のごとく ▲源川とよりしを落へゆしの勢と
おてと変こふ浮ちうぶ四方ふふ押頭のて 俳りゆと長家林の加賀武雄と称
雑ゆく生捕り陸更引て独り生ぶ 三水戸へ赴むき市川
是ゆ蒲の藩士ゆて先年源川の 三左衛門ゆ陸奥し七年月と
温泉ふ入浴ゆ出 赤田要ゆて 遂しが浴幸の五月☒

中ゆ兵が伝れ敗ゆ兵敗逃さ
ゆ兵ゆ図ゆて生徒藤長の策人
出るゆ出ゆ勘左衛門ゆ生ゆ日ゆ
赤田要ゆ日ゆ更ゆ出ゆ武田ゆ営ゆ入ゆ
猿子ゆ来ゆる故ゆの地理の先年生ゆ為ゆ
厳ゆ麦ゆて敗ゆ内ゆ猿ゆも白状ゆ生ゆ軍ゆ俗
冥ゆ泊ゆるゆのゆ先年ゆ出ゆ裏ゆ浮ゆ名ゆ雷ゆ
一挙ゆ得ゆ来ゆ士幸ゆ中ゆ付ゆ痛ゆ要ゆ来ゆ

☒世 細の 人 と 争 編 と 武雄と

次へ

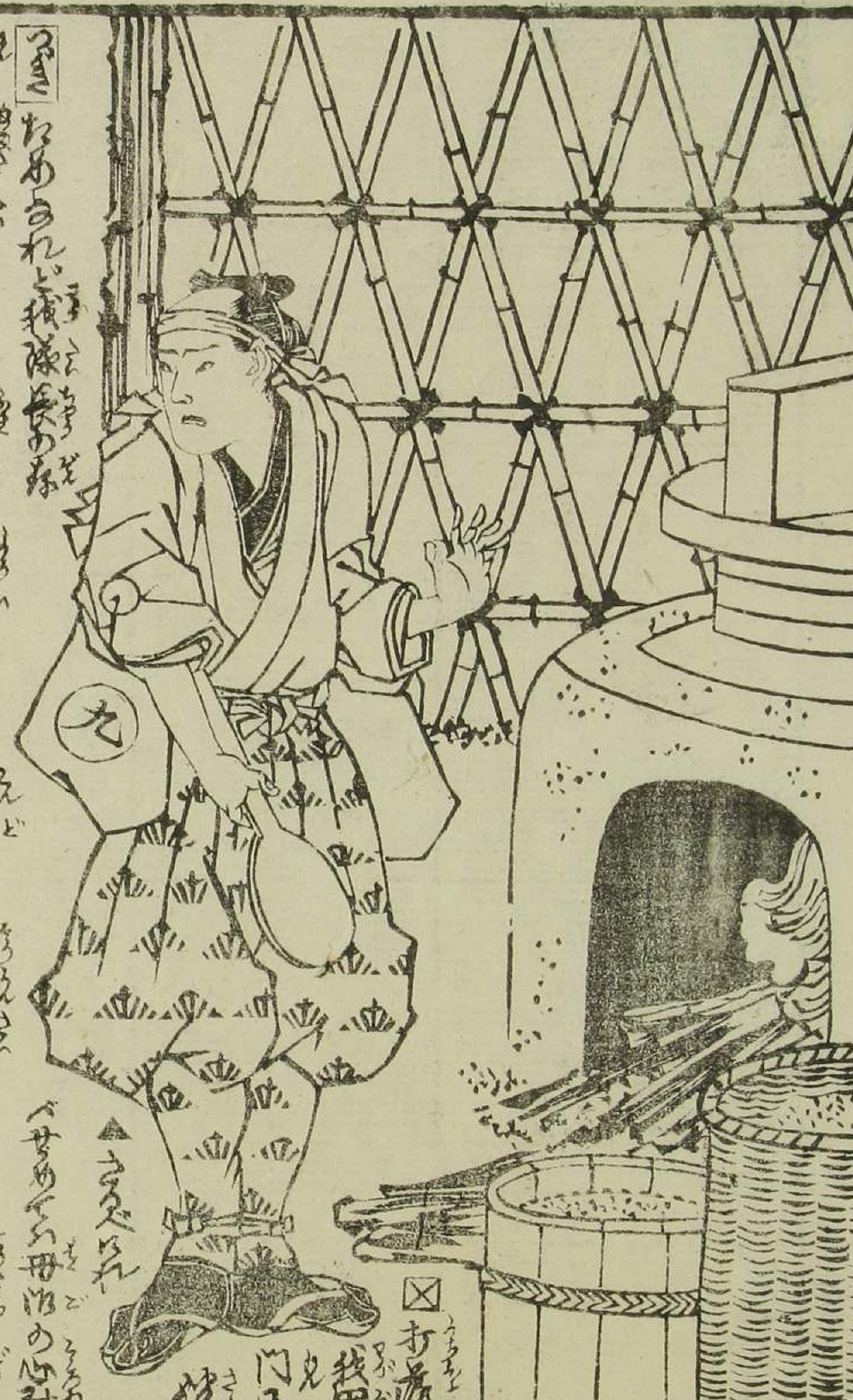
つぎ 芸ふ狂言 途あて武雅ふ別まてろふい別の
色塗ふのろ化ふ 若〜〜遂ふ天狗の舞
ふ入り今ゑ京
郷へ出る道中
近傍の路
案内ゑと
来ひよう
外ふ害心
ゆるれば
昔時の
訓練ふ
一命ゑみい助けてと乗くと尚
もおうこと化ふ年須川の湯治場ふて
金ゑ盗ひと 芸を清う問ふとやむふ

色まふ人
と 寿
ゆゑ
要い
若〜化
息を
つぎ
何家
さるこ
のまゑき
ふ濁ふ

やう〜一世一代とゆ状〜今く恵のろ〜ゆと眼〜
武雅と芸ふ伝合色 武田と家臣と
人郷ゑ殺害せんとうとしゆ
ゑ〜化遂ひ故郷後ゑく
出奔色ろと清ろふ
一回目七化合色
松いせんびの
ろの通ろ果
沼の家内の
離縁ふのひい女実
の化でありとろ場
き要とうひ ゑび人青海面へ恐び
味〜い義ふて仕ろけるための物ろろ

武田い
えろう戦手とのまず兵系
郷へ赴ひき一大事と奏宮
せんとの心ろれど
状慶い去ふ遊ぎ
られ進〜ゑ化を処伝ふ
芸郷後ゑく遂と聞くこ
め屋ゑ戦ひ潜〜と義と
遂ゑ沼田ゆて色去陸
と人車ゑを操出世し
とろふとき実意
と探れと伝つけ
ら遂る地程と知ろ

次へ



（つゞき）ねめつけられし我藤長吉が様
其ハ沼田の家が此所にて謀ぐべき用事が
あらバ途を遠くて信濃路へ進まんと
●今紋さへ耕吉改が
間者となりて旧敵のもと
▲ べきめそれ母衣の心懸
かれハ家来刀脇を
独者が勤める役の
⊠打返り我軍門に降

我藤の陣所を探り小田原の密意を聴きんと
必らず首を⊠
陣所へ赴き
くへ入る
東の

…
…
士等ハ先の事と…より…沼田の藩
…中の…を押…
…十八才…
…
…上に●
されバ…村の…
…
…

つき
九右衛門
村へ
宅へ
軍治
若げ

扨も
陣所
武士
墓
ふるる
ととの
伝れも
白狀ふ
城の
姫
むかの
殘ふ
とつを
心ぐ
油断
夜
傷
次へ

つゞき

続へと立寄れバ城の事ども待をりしが彼いがしも逃て入事ならず其所じやう陣小屋を焼しのぐにてもその儘中山左の方へと退きたるが未発動よ帰りて要へいち逃去たる所ぞ兵へ駆つけし軍治が侍の同胞ハ力を落し切歯をし残念がる事も左も右と行方も字の毒に思ふより要ハ一旦逃去る城の

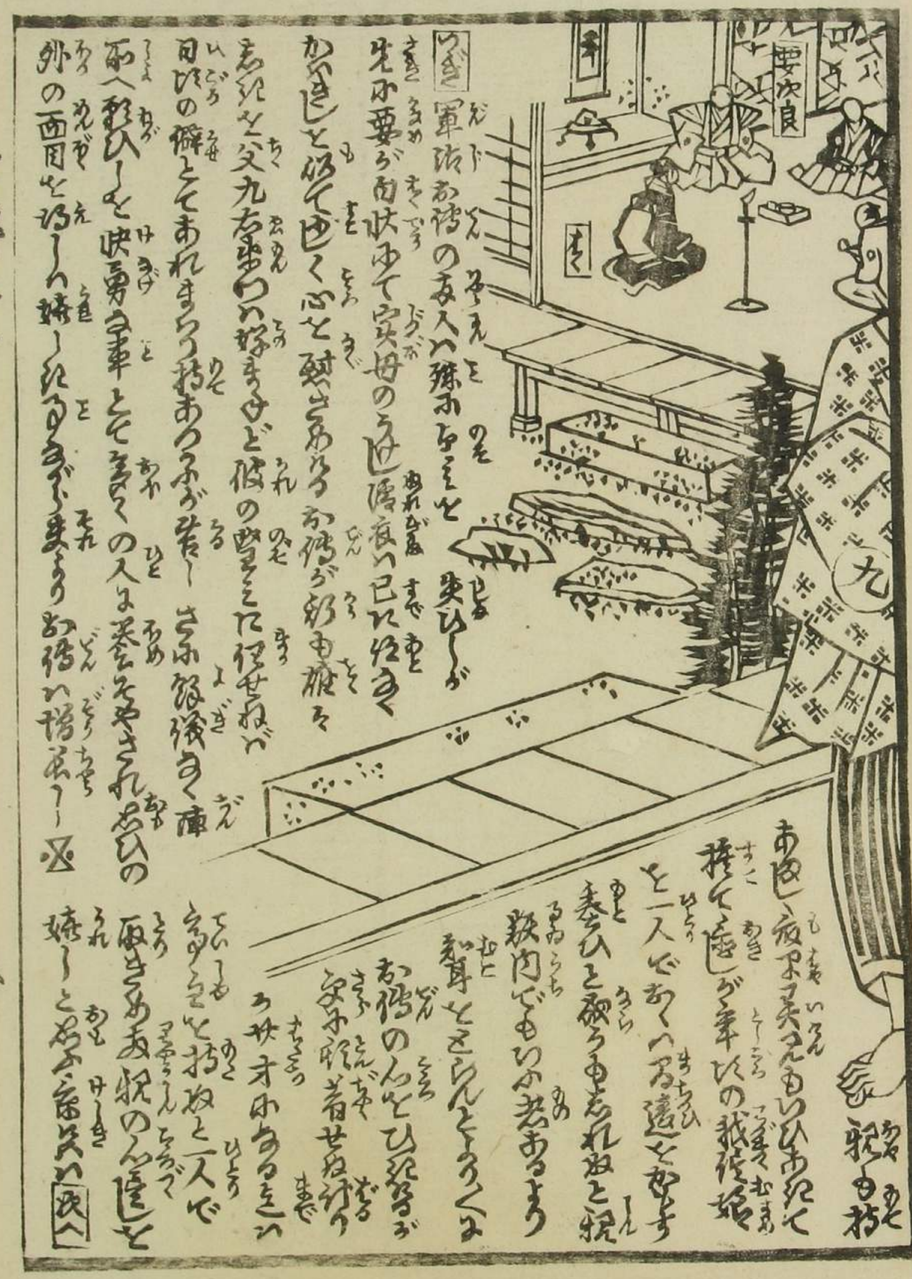
●革めて討手に向ひしと聞き耕雲斎も今の道ハ途ふちを知の加州の陣営へ降伏せしめ奉行沼田蔵ハ降伏を遂らせ要が主と同心せし者ハ打る者ハ城

肉よある事あれバ事でいろきて逃るべき今中も江戸から付手が向ひ城の内がある時は知らべ要も捕つた人も時は着へ申し上げ二人の都の目を通りに暁しそうせんと慰められて二人ハ本意なく下先宅へ引返しが其後に戸より田沼玄蕃頭が大軍を卒ゐて討手に向ひ浪藩の旨と為し中山左から城の門を遮りて数校の戦争に及び又敗れてそそう逃れハ又敗れ

※越前の数万の兵を率ゐて方一橋慶喜公が浪藩の者を●の内に専らぬ兎角浪人ハ途中討死せる但しハ逃去りしのちも…

次へ

要次良
要ア父


要次良

つゞき これぞむかしの母を
まのあたり見し
い教僧もやむ
るゝならんと
寛政元年の二月
の始め同村の
宮下某
の次男要之介とて
田舎には珍らしき縹緻よしと
郷中に其名も知れ渡り
を洞へ母ゝ

いふて御侍へ納得さ
せて吾田を撰て婿とせ
取るべき事にあらじが御侍は此由聞きて
承知の僧よりて先方へ遣わしたれども
きゝ入れずといふのを
急ぎ取りきめんと寄り
て飾りをせよと宥めるを承知せず男の家に入
り嫁入をせし娘の其後一生連添ん
心にて…
…

つゞき

沼田英淑寺さと岡てあぢんい

○昔ゑりあ伊ぢがうく養婦の守仏を

御届明治十二年二月三日
深川區富岡門前十六番地
編輯人岡本勘造

芳川春濤閲
其名も高橋
毒婦のお傳
岡本起泉編
東京奇聞 七編 切

芳川春濤閲
島田一郎梅雨日記 五編 切
岡本起泉編

芳川春濤閲
白菖阿繁顛末 三編 切
岡本起泉編

御所桜梅松録 十五編 近出板

命養生善惡鏡 一折本 一冊

單語圖解 一折本 一冊

太功記銘々傳 四冊

徳川年代鑑 一折本 一冊

亀錦地本繪問屋

麹町區壱番町六十番地
編輯人 岡本勘造
浅草區瓦町十二番地
出版人 綱島亀吉

へ14
2690
4-6